

奈良県における次世代型バンカー資材キットによる

施設イチゴ栽培のアブラムシ類防除

○山口貴大¹・井村岳男¹・小原慎司²・伊藤健司²

¹奈良県農業研究開発センター

²株式会社アグリ総研

奈良県のイチゴ促成栽培では、ハダニ類防除を目的としたカブリダニ製剤の利用が拡大している。また、主力品種の1つである‘古都華’は果皮が柔らかく、農薬散布によって傷みやすいことから、他の農薬も散布回数の更なる削減が望まれる。そこでアブラムシ類に対する天敵製剤の導入を検討している。今回の試験では、農研機構中央農業総合研究センターを中核機関とするコンソーシアムで開発された次世代型バンカー資材キット（以下、バンカーとする）を用いて現地試験を行い、本県のイチゴ栽培におけるアブラムシ類に対する防除効果を調査した。

調査は奈良県内のイチゴの現地生産圃場で2018年秋から2019年春にかけて実施した。バンカーの設置と更新は10月31日と1月31日に行い、このハウスをバンカー区とした。また、コレマンアブラバチマミー製剤のみを10月31日から1週間間隔で3回放飼する対照区と、化学農薬で防除する慣行区も設置した。調査圃場では、約1週間間隔で試験区全体から任意に選んだ100複葉に寄生するアブラムシ類の種別個体数とアブラバチのマミー数を計数した。

調査圃場では11月からワタアブラムシが全区で発生した。これと同時にバンカー区および対照区ではマミーが確認された。ワタアブラムシは、3月末まではそれぞれ1複葉あたり0.5頭以下、1頭以下で推移した。4月以降はこれに加えてジャガイモヒゲナガアブラムシが発生し、アブラムシ類の密度はそれぞれ1複葉あたり1頭程度、0.2頭程度で推移した。マミーは両区ともに1月～2月まで継続して発生し、3月下旬から増加した。さらに、バンカー区のマミーは4月下旬に複葉あたり0.2個まで増加した。バンカー区ではコレマンアブラバチとナケルクロアブラバチのマミーがおおむね継続して発生したが、マミー化していたのはほとんどがワタアブラムシであり、ナケルクロアブラバチによってマミー化したジャガイモヒゲナガアブラムシは一例のみ確認された。一方、慣行区では、化学農薬散布によってアブラムシを抑制していたが、1月末には1複葉あたり3頭以上、4月には25頭まで密度が上昇した。

以上の結果から、天敵製剤を使用した両区は慣行区よりも防除効果が高かったと考えられた。今回の調査では、コレマンアブラバチ製剤に対するバンカーの有利性は明確とならなかったが、今後さらに調査を継続したい。

Aphid Control using next generation type bunker kit in strawberry production-field in Nara.

Takahiro Yamaguchi¹, Takeo Imura¹, Shinji Kohara², Kenji Ito²

¹Nara Prefecture Agricultural Research and Development Center

²Agri-Soken Inc.